民主主義にして反民族主義，『ラデツキー行進曲』の捩じれ

武田智孝

はじめに ―― 転換点「ソルフェリーノ」

革命の 1848 年，ハプスブルク支配からの民族独立の機運はハンガリーとチェコを中心に高まり，北イタリアは独立戦争（第一次）を仕掛けた。オーストリアの超民族主義的コスモポリタニズムが揺ぎ，多民族を統治する君主国は分裂・瓦解の危機に立たされた。

グリルパルツァーは，反乱平定のためイタリアに向けて出陣するラデツキー将軍の武運長久を祈って，「麾下の陣営にこそオーストリアはある，ばらばらに砕け散るならわれわれは瓦礫にすぎない」[1] と詠った。ラデツキー将軍は北イタリア独立の夢を撃ち砕くことによって多民族国家の崩壊を防ぎ，救国の英雄となった。将軍の栄誉を称えて同年ヨハン・シュトラウス（父）によって作曲されたのが《ラデツキー行進曲》である。

この勝利や行進曲の二面性は明らかであろう。それはドーナウ君主国が抱える宿命的なディレンマそのものである。ハプスブルク帝国は一面では確かに「中世封建主義の遺産である神聖ローマ帝国の普遍主義」を引き継いでいて，「超民族的調和を図ろう」[2]と真剣に努めてもいたが，同時にそれが，フランス革命の精神である「自由・平等・友愛」の理念に逆らい，民主憲法を基盤とした国民国家の建設という近代史の流れに逆行する保守反動の帝国をも意味した。民族独立派のみならず，封建的な貴族支配に反対するリベラルな市民層にとっても，北イタリアでのオーストリアの勝利は苦々しく，《ラデツキー行進曲》の軽快なリズムは，帝国の反動体質――フランツ・ヨーゼフ一世は 1848 年 12 月に即位し，翌 49 年には，ハンガリー独立運動の指導者たちを数多く処刑した――を覆い隠す不愉快きわまる粉飾装置の一つとなった。

さて，ラデツキー将軍の勝利とその「行進曲」から 11 年後の 1859 年，イタリアは再び宗主国に戦いを挑み，今度は見事に独立を勝ち得た。勝敗を決定づけたのは北イタリア，ソルフェリーノの会戦だった。陸軍歩兵少尉ヨーゼフ・トロッタが身を挺してフランツ・

---

[1] Grillparzer, Franz: *Feldmarschall Radetzky*. In: Franz Grillparzer Sämtliche Werke 1. München 1969, S.318.

[2] Magris, Claudio: *Der habsburgische Mythos in der modernen österreichischen Literatur*. Wien 2000, S.25f.

ヨーゼフ一世の命を救う殊勲を立てたのは，この戦場においてである。それによってトロッタ家は貴族に列せられた。長編『ラデツキー行進曲』はここから始まる。

1859 年の北イタリア側の勝利は，ナショナリズムと民主勢力を勢いずづかせ，「神聖ローマ帝国の普遍主義」を旗印に，「超民族的調和」を唱えるハプスブルク君主国は，反時代的保守反動国家の烙印をますます色濃く捺されて，新時代勢力による攻撃にいっそう激しく曝されることとなった。「ソルフェリーノ」を転機に情勢はいよいよ民主的国民国家建設に向けて勢いを増す。この流れと斜(はす)に交わる形で新貴族トロッタ男爵家はスロヴェニア辺境の大地から切り離され，歴史に逆行する君主国の中に忠実なる臣民として取り込まれてしまった。彼らは必然的に，民族主義には与しえず，更に貴族としての身分や名誉に呪縛され，自由・平等の民主主義的理想にも背く反時代的な定めを背負わされて，ハプスブルク帝国と没落への歩みを共にすべく運命付けられた。

新男爵家の始祖ヨーゼフ・トロッタは，その殊勲にちなんで「ソルフェリーノの英雄」と呼ばれたが，この呼称には〈歴史的転換をもたらした敗戦における英雄〉，〈季節外れのヒーロー〉といった，ほろ苦いイロニーが漂っている。『ラデツキー行進曲』というタイトルにしても，ロートは転換点「ソルフェリーノ」以後を主題とする小説に，それより 11 年前の勝利を寿ぐシュトラウスの曲名をそのまま引用することで，意図的に，ズレ，齟齬，皮肉を刻み付けた。新貴族フォン・トロッタ男爵家は〈遅れて来た一族〉であり，楽曲《ラデツキー行進曲》も「ソルフェリーノ」を境に，しだいに輝きを失って，時代から取り残され，民衆に見放されたものとなって行く。ロートの小説が俗にオーストリアの『ブッデンブローク家の人々』と言われながら，なぜ《トロッタ家の人々》ではなく『ラデッツキー行進曲』なのか，という疑問に対する答えもここにある。

この長編には，モラヴィアの郡庁所在都市の庁舎前広場で毎日曜日の正午，軍楽隊によって《ラデツキー行進曲》が演奏される情景が出て来る。曲が始まったとたん，「聴衆の顔という顔はみな，夢見るような快い微笑にほころび，脚には血が騒ぎ立ち，立ったまま早くも行進している気分になり，若い娘たちは息を止めて唇を開いた。」(S.156f)[3]

そこでは，帝国の封建的反動政治のみならず，ソルフェリーノ以後の連戦連敗も大ドイツ主義構想の破綻もアウスグライヒも，ほんの昨日のことにすぎないはずのマイヤリングでの皇太子情死事件(1889)も皇后エリーザベトの暗殺(1898)でさえも，衝撃の歴史的事実はすべて人々の意識から消え失せ，愛国心によって一つに結ばれたかのような高揚した気分が，一時的にもせよ，あたりに広がる。モラヴィアの田舎町であれば，20 世紀初めであっても，行進曲はまだこの程度の麻酔作用を発揮し得たということであろう。

トロッタ家三代目の幼年学校生カール・ヨーゼフは，郡庁舎バルコニーの生い茂った葡萄の葉蔭で軍楽隊の演奏を聞きながら，自分をハプスブルク家の一員であるかのように感

[3] Roth, Joseph: *Radetzkymarsch*. In: Joseph Roth Werke 5. Romane und Erzählungen 1930-36. Amsterdam 1990, S.156f. 以後ここからの引用は( )内の S.数字で示す。

じ，いつの日か皇帝と祖国のために命を捧げるのだという決意に燃え，「軍楽の響きの中で死ぬのは最高だし，ラデツキー行進曲なら思い残すことはない。（中略）頭のまわりを弾丸が素早く拍子を取って飛び交い，抜き身のサーベルが煌めき，行進曲の優雅にして活発な響きに身も心もいっぱいになって，太鼓のリズムに酔い痴れ，彼の細い一筋の深紅の血が金色に輝くトランペットの上に，漆黒のティンパニーの上に，誇りかな銀色のシンバルの上に滴るのだ。」(S.160)と思い描く。「ソルフェリーノの英雄」の孫にとって，《ラデツキー行進曲》は，民族主義を超越した多民族国家の統一と融和を称え，愛国心を鼓舞するものでこそあれ，帝国の反動体質を覆い隠す粉飾装置ではありえなかった。

注意すべきは，作者ロートが祖国を持たない(1932 年当時)ユダヤ人で，シオニズムにも，西欧的野蛮（民族主義）の模倣だとして同調しなかったことだ。民主主義者として社会的不公正や不平等にはきわめて敏感に反応したが，民族間の平等を唱えて，他民族による支配を脱し，民族固有の独立国家を建設しようとするナショナリズムには否定的だった。そのようなロートの信条的矛盾，あるいは心情の捩じれはこの作品にも反映している。

《ラデツキー行進曲》の鳴り響く中，皇帝と祖国のために命を捧げるのだという，幼年学校生カール・ヨーゼフの子供じみた反時代的夢想がその後の彼の人生においてしだいに空洞化されて行く，その様を描くことが物語の中心の一つをなしている。しかしロートの筆致は風刺的，冷笑的というより，一抹の哀しみを感じさせる。放浪のユダヤ人に一定の安全を保障してくれていた多民族国家のコスモポリタニズムが民族主義の激化によって崩れ去ることへのロート自身の嘆きが重ね合わされている。

一方，貴族に取り立てられたトロッタ家，特に二代目郡長のほとんど硬直した身分的名誉重視の姿勢を初め，彼が体現する帝政末期の差別的な封建制社会秩序に対しては批判的である。その問題性を俎上に載せることが作者の狙いの一つであったと思われるので，以下に先ずその点から検証を始めたい。

「恋文の束」の値段

新しく創始されたフォン・トロッタ男爵家初代の話は早々と第一章だけで終わってしまい，それ以降はもっぱら二代目のフォン・トロッタ郡長と，とりわけ三代目カール・ヨーゼフが物語の中心になる。

第二章では早くも「ソルフェリーノの英雄」の孫カール・ヨーゼフが幼年学校時代に，夏休みで帰郷した際，警備隊曹長スラーマの妻と愛人関係になり，第三章では，夫人が身ごもって，難産の末，生れて来た子供とともに世を去るという出来事が報告される。

曹長は，妻の遺品の中から見つかったカール・ヨーゼフからの「恋文の束」を，父である郡長の許に持参するが，フォン・トロッタ男爵はさっと目を通しただけで受け取らず，直接息子のカール・ヨーゼフに返却するよう指示する。

郡長はいったいなぜそういう措置を取るのだろうか。しかも彼が息子の不行跡をスラー

マ曹長に詫びた形跡はないし，不倫についてもスラーマ家の不幸に関しても，息子に対していっさい説教めいたことを口にしない。

郡長は，息子が無事幼年学校を卒業して少尉となり，騎兵連隊への入隊が決まった直後，公用でウィーンへ出張するが，連隊勤務の支度を整える目的も兼ねて息子のカール・ヨーゼフを旅に同行させる。あと 15 分でウィーン到着という列車の中で，彼は息子に初めてスラーマ夫人の死を知らせる。「おまえは曹長のスラーマを知っているだろう。（中略）鰥夫(やもめ)になったよ，遺憾なことさ(leider)，今年だよ。（中略）悲しいね(traurig)。お産で亡くなったんだ。訪ねてやってはどうかね。」(S.173)これだけだ。曹長が恋文の束を持参した後のことなので，スラーマ夫人の死の原因になったと思われる息子と夫人の関係の一部始終を，このとき既に郡長は知っているのである。

故郷の町に帰ってからのスラーマ宅弔問の後，少尉は気持ちを落ち着かせるためカフェに立ち寄ってコニャックを注文するが，来合せていた父親との対話でも，「不愉快な態度でも取ったかね，スラーマは?」と父親が尋ね，「いいえ，愛想良くしてくれました」と息子が答えると，「そりゃそうさ(Na, also!)」と言う。息子が見せた「恋文の束」にも，「随分とまめに書いたものだ(Recht viele Briefe!)」と，呆れたように言うだけ。二人が郡の庁舎に帰り着いた時，ちょうど雨の中を勤務日誌を小脇に抱えてヘルメットに銃剣を帯びたスラーマ曹長が門を出て来るのと鉢合わせになるが，「やあ，スラーマ君，何も変わったことはないね，えぇ?」と郡長が念でも押すように声を掛け，「何もありません」と曹長が答える。これで一件落着。(S.191f.)

ちなみに，父親がカフェで息子に忠告するのは，今後は安物のコニャックではなく，もっと上等のを注文するように，ということだけだ。

この一件に関して郡長はなぜかくも冷静，というか，冷淡な態度を取るのだろうか。注意深く読んでみると，その背景を知る手掛かりらしきものが，作中ないわけではない。

彼は，息子を伴ってウィーンに出張した際，フォルクスガルテン近くのカフェでコーヒーを飲みながら，遠く過ぎ去った学生時代に思いをはせ，「昔ここである町娘(ein kleines Mädel)と知り合ったものだ。あれからどれくらい経つかのう（中略）ミッツィ・シナーグルという名前だった」と懐かしげに話す。「まだ生きているのですか」という息子の問いに，「たぶんな。いいかね，われわれの時代はめそめそ(sentimental)したりはしなかった。娘からも友人からもきっぱりと別れを告げたものだ。」(S.175)と答える。

ちなみにこの直前，既にホテルで，恋人スラーマ夫人の死の知らせに動揺を抑えきれない様子の息子に対して父親は，„Es scheint, daß du ein weiches Herz hast!“(S.173)と言っている。邦訳は「どうやらお前は優しい心の持ち主のようだ」[4]となっている。「優しい」と言えば褒め言葉だが，weich というドイツ語は「軟弱な，柔弱な，柔な」といったニュアン

[4] ヨーゼフ・ロート『ラデツキー行進曲』(平田達治訳) 鳥影社 2007 58p

スで, そこには非難の響きが聞き取れる。カフェで郡長が口にする sentimental がこの weich に呼応しているのは明らかだ。

さりげないこの会話にこそ，スラーマ夫人の死に傷心の色を隠しきれない息子に対する厳父からの唯一のメッセージが込められていると見て，間違いあるまい。息子カール・ヨーゼフにとってのスラーマ夫人は，かつての自分にとっての町娘ミッツィ・シナーグルである。一年か一年半に及ぶその娘との甘い交情は懐かしくも物悲しい青春の思い出ではあるが，身分にふさわしい道を歩むために自分がその娘への思いを断ち切って，きっぱりと別れを告げたように，息子もスラーマ夫人への未練をいつまでも引きずるべきではない。ここで父親が息子に伝えたかったのは，そのようなことであろう。

郡長フォン・トロッタ男爵が息子とスラーマ夫人の情事について，その「不行跡」を咎めず, いや「不始末」とさえ認めることをせず, 何一つ説諭らしい言葉も口にしないのは, 上流男子と下流子女の一時的な交情が当たり前の時代に，彼自身が青春を謳歌し，そのような出会いと別れを体験していたから，にほかならない。

これとの関連で注目すべきは,「町娘」と訳した ein kleines Mädel という表現である。この klein はどういう意味か。

邦訳は「かわいらしい女の子」[5]とか 「小さな女の子」[6]となっている。しかし，この小説には下層の人々を意味する kleine Leute(S.397)という言い方も出てくる。また，シュニッツラーの戯曲『アナトール』では die große Welt（上流社会）と対比させて die kleine Welt[7]という表現がある。「可愛い町娘(das süße Mädel)」の生活圏である下層社会を指す言葉だ。アナトールとの対話の中で最初にこれを使うのは，誇り高く身分意識の強い貴婦人ガブリエッレである。ein kleines Mädel は ein Mädel aus der kleinen Welt の意味だ。

要するに Kleinbürger の klein だが,「小市民の娘」とか「下層社会出身の娘」では，日本語訳としておかしい。良家の令嬢でないことが分かればいいので,「町娘」くらいが適当ではないかと思う。とはいえ，ドイツ語の ein kleines Mädel には，身分制社会が抱える様々な矛盾やひずみに対して無頓着でいられた世代の下層庶民に対する無意識的な蔑視が込められているが,「町娘」という訳語だと，そういうニュアンスは消えてしまう。

「町娘」と言えば, シュニッツラーの das süße Mädel があまりにも有名で,「可愛い町娘」と訳すのが定番になっているが，これも hübsch ではなく süß というところに，日本語訳では捉えきれない，相手を気軽なお楽しみの対象と見なす気楽な差別意識が潜んでいる。原語の背後には，身分制社会の闇を見つめるシュニッツラーの透徹したリアリズムの目がある。しかし「可愛い町娘」という訳から，そういう事情を察することは難しい。

---

[5] ヨーゼフ・ロート『ラデツキー行進曲』(柏原兵三訳) 筑摩書房 1974 201p.
[6] ヨーゼフ・ロート『ラデツキー行進曲』(平田達治訳)　同上 60p.
[7] Schnitzler, Arthur: *Anatol*. In: Arthur Schnitzler Die Dramatischen Werke I. Frankfurt a. M. 1981, S.43.

結婚するためには財政的な裏付けがなければならない。それまでの間を貴公子たちはどう凌ぐか。上流社会の令嬢はいまだに「処女性の名誉」に縛られたまま。貴婦人はガブリエッレのように気位が高く，上流社会の窮屈な制約の中で身動きが取れない。万一そういう関係になったとしても，常に決闘の危険と背中合わせである。商売女相手だと性病感染の不安が付きまとう。貴公子たちにとって貧しい下町の女たちは，独身時代につきあい，ひと時の楽しみと慰めを味あわせてもらったあと，さほど良心の呵責を伴うこともなく手を切ることのできた格好のお相手だった。だから süß なのだ。

注目すべきは，この前後に「お人好しのシュトランスキー(der gute Stransky)」叔父さんの話が出て来ることだ。郡長の妻の兄弟で，かつて軍の将校だった。20 年ほど前，コッベルマンというつましい身分の娘に惚れ込んでしまって，結婚した。オーストリアの軍隊では，将校が結婚するときには Kaution（結婚供託金）を納める必要があった。将校が戦死した場合に，遺された妻子に身分相応な暮らしを保障するため，基金が積み立てられていて，その利子から寡婦や遺児の年金が支給される仕組みになっていたのである。結婚供託金は将校の年収の約十倍に及んだと言われている。双方が折半して負担するのが普通だったが，下層庶民の娘が相手だと，相手の家には半額を支払うだけの経済力がない。シュトランスキー家にも全額を負担するだけの資産はなかった。彼は中尉だったが，結局軍隊を辞めて，鉄道会社に就職しなければならなかった。

郡長フォン・トロッタ男爵の，シュトランスキーに対する軽蔑ぶりは徹底したもので，当時妻から供託金の半額を出してやってほしいと頼まれた時も，てんで取り合おうとせず，その結婚騒動以来 20 年間というもの，ウィーンに出張してもただの一度として訪ねたことがない。Koppelmann という相手の女の苗字をいまだに噛んで吐き捨てるみたいに口にし，二人の間にできた男の子がちょっと足が不自由なのを，愚かしい身分違いの結婚の当然の報いのように考えている。郡長フォン・トロッタ男爵にとっての不始末とは，身分の低い女との情事や，相手の妊娠ではなくて，身分違いの結婚(unstandesgemäße Ehe)なのだ。

だが，身分秩序に拘る郡長の態度はけっして例外ではない。グストル少尉も今つき合っている「可愛い町娘」シュテッフィにしきりと想いを馳せながらも，いつかはやはり「結婚供託金を支払ってくれるだけの資産家の娘」[8]と結婚しなくては，などと考えている。

町娘との情事はかまわないが，結婚など論外，というのはオーストリアの将校や上流社会の常識だったばかりではない。Kaution 制度のなかったドイツの軍隊でも事情は同じで，1900 年には，親族や同僚からの猛反対に遭い，心中に追い込まれる将校と町娘を描いた悲劇(Hartleben: „Rosenmontag“)が大当たりを取ったほどだ。

息子に対する郡長の言葉に，身分制社会に生きる貴公子への処世訓はあっても，道義的忠告の要素が微塵もないのは，以上のような背景があってのことだ。

---

[8] Schnitzler, Arthur: *Leutnant Gustl*. In: Arthur Schnitzler Die Erzählenden Schriften Ⅰ. Frankfurt a. M. 1981, S.363.

むろん，相手が未婚か既婚かの違いはある。しかし，未婚にしろ既婚にしろ，上流と下層とでは，貞操の値段に大きな差があった，そのことの方が重要だろう。

キーワードは「名誉(Ehre)」である。

未婚の娘の場合，昔は身分の上下を問わず jungfräuliche Ehre というものが認められていて，この名誉ゆえに数多くの悲劇も起きたが，世紀転換期ともなると，貞操が問題になるのは上流社会の令嬢に限られていた。下層社会では jungfräuliche Ehre なんかもはや過去の遺物と化していた。町娘たちは，貞操を重んじる上流社会から締め出された貴公子たちの受け皿になりえたのである。

既婚の場合，つまり姦通・不倫(Ehebruch)の場合は，問題を男に限ると，コキュ，寝取られ亭主(Hahnrei)という言葉があるように，宗教とか道義・道徳よりも，むしろ名誉とか恥，体面，の方に重点が置かれる。

上流社会は名誉ある決闘有資格社会(die satisfaktionsfähige Gesellschaft)だから，妻の不倫によって傷つけられるのは貴紳たる夫の名誉で，夫は妻の不倫相手と決闘することによって，損なわれた名誉を回復することが出来たし，しなければならなかった。それをしなければ，名誉を失ったと見なされ，上流社会から追放された。同じ「恋文の束」でも，『エフィ・ブリースト』では悲劇の発端となり，シュニッツラーの戯曲『戯れの恋(Liebelei)』でも，裏切られた夫が妻の不倫相手の青年フリッツに証拠の品として妻宛ての「恋文の束」を突き付け，決闘に至る。

スラーマ夫人が，もし警備隊曹長ふぜいの妻などではなく，貴族か将校の夫人なら，当然決闘になったはずだ。しかしスラーマは「名誉」などとは無縁の決闘無資格社会(die satisfaktions*un*fähige Gesellschaft)の一員である。妻の不倫によって傷つけられるほどの名誉など彼には認められていない。これが身分制社会の冷厳な秩序なのだ。

両者の間には決闘があり得ないばかりではない。恋文の束を返す際，腰を低くして謝るのはスラーマの方なのだ：„Bitte um Entschuldigung!“（お赦しください）(S.190)。

さてここで再び，郡長フォン・トロッタ男爵がなぜスラーマ曹長の持参した「恋文の束」を受け取らず，直接息子に手渡すよう指示したか，という最初の疑問に戻ると，実はこの問題に言及しているのは，管見のかぎりでは，H. Scheible だけで，彼によると，「心苦しい状況にあっても，どう身を処すべきかを少尉に学ばせよう」という父親の教育的意図からだという。「たとえ既に国家の秩序がどんなに弱体化していようとも，社会的に下位の身分の者に対しては，酷薄との紙一重の厳しい態度で臨むのだ。」[9] 若い少尉にこれを体得させるための措置だ，というのである。

カール・ヨーゼフに妻を寝取られ，いわばその命までも奪われた警備隊曹長スラーマと一対一で対面し，自分が夫人に書き送った恋文の束を夫スラーマから受け取る，このいわ

[9] Scheible, Hartmut: *Joseph Roth. Mit einem Essay über Gustave Flaubert*. Stuttgart Berlin Köln Mainz 1971, S.144.

ば修羅場を体験させることが，これから世に出て行く息子に身分制社会の秩序とはどういうものか，その中で上流人士は下流社会にどのように冷厳な態度で臨むべきか，貴族の子弟としての心得を身に付けさせようという親心なのだというのである。

Scheible の説明はそっけないほど簡潔で，その驚くべき内容を理解するために，筆者はこの章において行った考察のすべてを必要とした。

「身分的名誉(Standesehre)の犠牲」

スラーマ・エピソードに続く数章において，カール・ヨーゼフが入隊した騎兵隊の将校たちによって行われる決闘と,そこに至る経緯が詳しく報告されているのは注目に値する。

きっかけは実に些細なものだ。軍医ドクター・デーマントの美しい妻が劇場から一人で出て来たところを，偶然そこに居合わせたカール・ヨーゼフが，立場上当然ながら，エスコートして夜遅く彼女の家まで送り届ける。不用意にも将校クラブの前を通ったので，目撃した同僚が翌日そのことで軍医を棘のある言葉で揶揄する。諍いとなり，デーマントは相手の将校を「酔っぱらいの卑劣漢(Sie sind besoffen und ein Schuft!)」と呼び，相手はユダヤ人である軍医を「ユダ公(Jud)，ユダ公」と八回立て続けに罵る。(S.226) これで決闘になって二人とも命を落とすのである。当時の名誉規定(Ehrenkodex)では，一旦 Schuft（卑劣漢）などという言葉が口にされたが最後，決闘は避けられなかった。

どちらもカール・ヨーゼフが絡んでいるが，スラーマ夫人との場合は不倫の当事者であるにもかかわらず決闘など問題にもならず，他方は，夜遅く，人妻をただ家まで送り届けただけ，それが決闘の引き金になる。こういう作品構成には，上流と下流の身分の違いを際立たせ，いずれの場合も逆の形で理不尽にすぎることを示す意図が働いていたと見て間違いあるまい。

しかし，決闘とそこに至る経緯を報告した息子の手紙に対して，郡長フォン・トロッタ男爵は，「（決闘で斃れた）二人は名誉ある男子にふさわしい死を遂げたのだ。私の若かった頃はもっと頻繁に決闘が行なわれ，命よりも名誉の方がはるかに尊ばれたものだ。」(S.245)と返事を書いている。

決闘で倒れた一方の当事者ドクター・デーマントの舅で，やり手実業家のクノップフマッハー氏は，弔問に訪れたトロッタ少尉に向かって,「名誉の掟なんてものは時代遅れもはなはだしい。私たちは 20 世紀に生きているんですよ。蓄音器があるし，電話で何百マイルも向こうの相手と話も出来る。ブレリョオをはじめ大勢が空を飛ぶ時代です（1909 年英仏海峡横断飛行[引用者注]）。無記名の普通選挙も行われるようになった」と言い，話相手の煮え切らない受け答えに苛立って,「このバカげた軍隊とその気違いじみた制度とに業を煮やし」,「名誉だの決闘だのという愚劣なことを廃止する今や潮時であり，20 世紀に将校などという役立たずの若造どもをのさばらせておくようではだめだ」と考える。(S.252f.)

他方,「役立たずの若造ども」と思われていた将校たちも実は，名誉の掟を時代遅れと

感じ，名誉だの決闘だのを愚かなことと思う点では，ドクターの舅と同じなのだ。カール・ヨーゼフは決闘の行われる前夜，連隊で唯一の親友であるドクター・デーマントがむざむざ死に赴くのに耐えられず，「こんな死に方は無意味ですよ」と言い，当事者である軍医本人も，「こんなのバカげてますよ。サーベルのアホらしい房飾りにぶら下がった名誉なんて。人妻を家まで送り届けることもできないんですからね。どんなにバカげているか，お分かりでしょう。」さらに「バカげた鉄の掟」，「愚かな決闘」と嘆いた後，「僕にはこのバカげた決闘から逃れる力がない。僕はバカげたことのために英雄になるのさ，名誉の掟と服務規定に従って。エイユウにだ!」と自らを嘲けり笑うのである。(S.233ff)

語り手は手短に「二人は厳しい身分的名誉(Standesehre)の犠牲になった」(S.243)とだけコメントしているが，トロッタ少尉とデーマント夫人の夜の散歩に端を発した将校どうしの決闘は，硬直した名誉規定に縛られた決闘有資格社会の悲劇的茶番劇とでも呼ぶほかなく，「名誉ある男子にふさわしい死」というフォン・トロッタ男爵の賛辞が，現実からいかに遠くかけ離れたものだったかは明らかである。

「身分的名誉」の凋落

少尉カール・ヨーゼフは，決闘のきっかけを作って二人の将校を死なせてしまった責任を取る形で，自ら志願して，騎兵隊から格下の歩兵隊に転じ，帝国の東の端，ガリツィアの B 駐屯地に赴任する。数多くの沼池に覆われ，ロシア国境からわずか 2 マイルという，世界から隔絶された地には，既に大きな戦争と「没落の予感」が漂い，「将校たちのある者は絶望に瀕し，ある者は賭博に耽り，ある者は借金地獄に陥り，怪しげな連中の手に落ちて行った。」(S.259)

カール・ヨーゼフも憂鬱と閉塞感を紛らせるために，やがて 90 度と呼ばれる強烈な火酒をあおるようになり，賭博で大金を擦った仲間の将校の保証人になって借金を造り，これを見かねたポーランド貴族から貴婦人を紹介されて，母親ほども年の違う薄幸の美女との逢瀬のために，隔週毎に最果ての駅から汽車で 17 時間をかけてウィーンに赴く。少尉の俸給や父親からの仕送りだけでは足りず，興行師で金貸しのカプトゥラークから借金を重ね，それが 7 千クローネを超える額に達した時，連隊の皆に人気のあった陽気な大尉がスパイ容疑で逮捕，連行されるというショッキングな事件が起きる。

カプトゥラークはこの大尉にも多額の貸しがあり，今やそれが回収不能となったことでパニックに陥り，カール・ヨーゼフの許に飛んで来る。一週間以内に全額返済を…と迫る金貸しに対して少尉が，その話は翌日にしてくれと言うと，「明日ですって。明日ではひょっとすると手遅れになるかもしれないんですよ。ここで毎日どんな思いがけないことが起きるか，御覧の通りです。私はあの大尉のおかげで一財産失くしました。（中略）あなたは大尉のお友達でしたよね!」(S.380)

大尉と同じスパイの一味で，いつ逮捕・連行されるか分からないという疑念が仄めかさ

れたわけだ。将校の名誉を汚す言語道断な発言である。だが，相手は名誉ある決闘有資格社会の人間ではない。汚辱をぬぐうべく決闘に訴えるわけには行かない。カール・ヨーゼフは背後の壁に懸けてあったサーベル，名誉の象徴であるサーベルの鞘を払い，後ずさるカプトゥラークの胸元に抜き身の剣を突き付ける。黒っぽい服を着た金貸しは両腕を広げ，両脚を一つに絡ませて白いドアに寄り掛かる。少尉の目には一瞬その姿が揺らめいて，十字架が立ち現れる。彼は不覚にもサーベルを取り落す。(S.381f.)

突然なぜ十字架なのか。仲間は 90 度のせいだと言う。酔漢の見た幻影だと言うのだ。だが，強烈な酒のせいで意識の統制が弱まり，服務規程以前の人間性が蘇ったということはありうる。…もしこのまま相手を刺し殺したら，罪なき者の血を流すことになる，この者を裁く資格がお前にあるのか。愛人と逢瀬を重ねるために借金を膨らませたお前に･･･。十字架はそういう内心の警告を意味したと取ることも出来るだろう。カール・ヨーゼフにとって名誉はもはや彼の父親にとってほど絶対的な価値ではない。そこにキリスト教的省察の入りこむ余地もあった。

もし少尉の父，フォン・トロッタ男爵であれば，不埒な言葉で自らの名誉を汚した相手をそのまま刺したかもしれない。彼は「息子の死の知らせよりも，息子の不名誉の知らせの方により大きな衝撃を受ける類の旧時代の父親」(S.392)だと言われている。事実，報せを受けた男爵は，皇帝に仕える軍の将校が（スパイ容疑を口にした）名誉の侵害者に対して，借金があるという引け目から，然るべき処置も取れなかった，そのふがいなさ，不名誉に衝撃と怒りを覚え，そんな者は即座に軍務を退くしかないと考える。(S.392)

だが一方，名誉規定によれば，賭博で作った返済不能の負債は名誉喪失を意味し，24 時間以内に返済がかなわなければ，汚辱を雪ぐために自決しなくてはならない。ズーダーマンの『名誉(Die Ehre)』(1889)や，シュニッツラーの『夜明け前の一幕(Spiel im Morgen- grauen)』(1927)でも，将校に課せられたこの名誉の掟が鍵になっている。返済不能の借金はなぜ恥辱(Schande)を意味するのか。賭博などで将校がする借金を Ehrenschuld（信用借り・名誉の懸かった借り）と呼ぶ。名誉ある身分（将校）を担保とした借りだからだ。それを返さない，返せないというのは，信用の前提たる名誉を汚し，失うことを意味する。スパイ容疑で逮捕された大尉の前任者は賭博の借金が原因で命を絶ったのだった。カール・ヨーゼフの場合はギャンブルの負債ではないし，貸し手はカプトゥラークのように名誉なき階層の者ではあったが，それでも，所定の期日内に返済できなければ，軍籍剥奪というきわめて不名誉な措置が待ち受けていた。

スパイ容疑を口にした名誉の侵害者に対して，借金があるという負い目から，あるいは，キリスト教的な自省の念から，サーベルを取り落としたカール・ヨーゼフではあったが，債務不履行による軍籍剥奪という恥辱には耐えられない。彼もまだその程度には名誉の呪縛から自由ではない。

同じ不名誉でも，スパイ呼ばわりして名誉を傷つけた金貸しに然るべき処置が取れなか

ったという不名誉と，返済不能な債務を抱えたまま軍から追放処分を受ける不名誉と，この二つでは，恥辱(Schande)の質や度合いが違うのである。

彼は上官の勧めに従って，父親宛に援けを乞う手紙を書く。

「名誉の守護者」「遺産の保護者」と呼ばれ，「身分的な名誉とか，家族の名誉とか，個人の名誉」を重んじる旧時代の人間である(S.392) と言われている男爵フォン・トロッタ郡長にとって，軍籍剥奪という息子の不名誉はトロッタ家の不名誉である。彼は金策に奔走するが，すべて不調に終わった時，皇帝フランツ・ヨーゼフ一世に直訴するしかない，という途方もない考えに取り付かれる。「ソルフェリーノの英雄は皇帝のために血を流した。カール・ヨーゼフだって，ある意味ではそうなのだ。不穏ないかがわしい〈輩〉や〈分子〉と闘ったではないか。フォン・トロッタ男爵の素朴な考え方からすれば，これは皇帝の恩寵(Gnade)を濫用することには当たらないのである。臣民が信頼してフランツ・ヨーゼフの許に出かけるのは，子供が困った時父親のところへ行くのと同じなのだ。」(S.396)

封建的身分社会における臣の忠誠・奉仕に対する君主の保護・恩愛の関係がよく出た個所である。息子だって「不穏ないかがわしい〈輩〉や〈分子〉と闘った」というのは，カール・ヨーゼフが，労働条件改善を求めるデモを鎮圧するため，部隊の指揮を任されて，「ソルフェリーノの英雄」と同じ「左鎖骨骨折」の重傷を負うたことを指している。その際，少尉自身も仲間の将校たちも，ひょっとしたら労働者たちの言い分の方が正しいのかもしれない，という思いを心の片隅から追い払うことは出来なかったのだが…。(S.332)

半世紀余り前に「ソルフェリーノの英雄」となった祖父は，民族の独立を妨げる帝国の企図に与し，その戦いで皇帝の命を救った。歴史の流れに逆行しているなどとはつゆ思わず，迷いはなかった。彼がマリア・テレジア勲章によって顕彰され，貴族に列せられることを不当と感じた者は誰もいない。

負傷の箇所（左鎖骨）は同じでも，孫カール・ヨーゼフの場合は，決闘で斃れた軍医デーマントと同じく，名誉からも信念からも見放されている。

しかし，そんな違いは父親フォン・トロッタ郡長の目には入らない。彼は拝謁を求めて政府高官たちの許を訪ねる時，父のことを「ソルフェリーノの英雄」としか呼ばず，トロッタ家の名誉を守ることしか念頭にない。

そういう男爵の姿は「旧いハプスブルク君主国の亡霊」,「歴史の幻影」(S.399)と評され，郡長の話を聞いた高官たちは，「ソルフェリーノ」という地名を耳にした瞬間，「首筋に氷のような死神の吐息を感じた」(S.402)と言われている。北イタリア独立阻止のための戦闘で雌雄を決したソルフェリーノの会戦における敗北は，ハプスブルク帝国没落の運命をいち早く予告するものだった。モラヴィア地方の一郡長にとってソルフェリーノは依然として彼の父,「ソルフェリーノの英雄」と結びついていたが，首都ウィーンの政府高官にとっては，帝国崩壊の始まりを告げる不吉な地名を意味したのである。

しかし，中央官庁の官僚たちは，鬼神に憑かれたかのような地方高官の迫力に圧倒され

て，不可能と思われた謁見の実現に協力し，皇帝の恩愛によってすべてが解決される。

だが，これは美談だろうか･･･。

郡長フォン・トロッタ男爵の意識が 50 年遅れていたように，皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の頭の中では，幾つもの世代が交錯し，面前の郡長もその父親も孫のカール・ヨーゼフ少尉も入れ替わり重なり合って，互いに区別がつかない。君主は既に時間や歴史を超越した存在になっていたのだ。「ソルフェリーノの戦闘で自分の命を救ってくれたのが少尉の祖父だったのか，それともその父親だったのか，皇帝はまたしても忘れてしまっていた。ソルフェリーノの英雄がいきなり郡長になったのか。それとも目の前にいるのはソルフェリーノの英雄の息子なのか。（中略）彼は頭が少々こんぐらがって，<あの青年（ガリツィアの大演習の際に握手した若いカール・ヨーゼフ・フォン・トロッタ少尉［引用者注］）がわしの命を危ない所で救ってくれたのじゃったな。それともそなたじゃったかな。> <陛下，ソルフェリーノの英雄は，それは，私の父でございます>（中略）<彼は幾つになるかのう。（彼が死んだのはもう 30 年も昔だ。[引用者注]）>」(S.406)

時代から隔絶したところに生きる二人の老人によって，少尉カール・ヨーゼフとトロッタ家の名誉は守られたのである。「名誉」というものの時代錯誤的な性格をこれほど鮮やかに映し出して見せるお話を想像することは難しい。

だが，このエピソードは名誉と金，正義と恩寵の問題をも提起している。

ドイツ文学には，レッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』(1767)からズーダーマンの『名誉』(1889)に至るまで，名誉と金の問題を扱った作品が幾つか存在するが，名誉は金銭によって汚されるところの多い価値である。テルハイム少佐に掛けられた横領の嫌疑が名誉を毀損することは明白だが，返済不能の借金が将校にとってなぜ不名誉・恥辱を意味するかについては既に述べたとおりである。

テルハイム少佐の横領疑惑は裁判所の調査と審理によって晴らされるが，彼に名誉回復を告げ知らせるのは国王からの親書である。封建的位階制秩序の頂点に位する君主にこそ，名誉の源泉がある。

しかし，テルハイム少佐は「ご慈悲なんてまっぴら，私が望むのは正義(Gerechtigkeit)です」[10]と言い，王の勅書が恩赦(Gnade)ではなく正義の判決を伝えるものだったことに満足する。『マリア・マグダレーナ』のアントン親方も，窃盗の疑いを掛けられた息子カールの身の潔白に関して，「何しろ，臣民が忠誠を尽くすのと引き換えに正義(Gerechtigkeit)を通さなきゃならねえ，いちばん身分の低い者にいちばん手落ちのないようにしてやらなきゃならん，それが王様なんだから。」[11]と言っている。19 世紀前半のドイツでは，一介の職人

---

[10] Lessing, Gotthold Ephraim : *Minna von Barnhelm oder Das Soldatenglück*. In: Gotthold Ephraim Lessing Werke in drei Bänden. Hrsg. von Herbert G. Göpfert. München (Hanser) 1982, 1. Band.　S.490.

[11] Hebbel, Friedrich : *Maria Magdalene*. In: Friedrich Hebbel Sämmtliche Werke. Historisch kritische Ausgabe. Bern (Herbert Lang) 1970, 2. Band. S.41f

にとっても，忠誠を尽くす臣民に対する王の責務は法と正義を守ることであって，恩寵ではない。

しかし，既に見たとおりフォン・トロッタ郡長は「皇帝の恩寵(Gnade)」(S.396)を期待し，拝謁する際も正義など口にしないし，口に出来る立場にもない。返済不能の負債が問題であるいじょう，「愚息のためになにとぞご慈悲を賜りたく，お願い申しまする(Ich bitte um Gnade für meinen Sohn!)」(S.407)とひたすら恩愛を希うしかない。

ドイツ文学史上の硬骨漢たちに比べると，こんな問題を君主の許に持ち込んで，ひたすら「慈悲」を乞い願う郡長の姿勢も，詳しく事の理非を問い質すこともせず，あっさり嘆願を聞き届けてしまうフランツ・ヨーゼフ一世の恩愛も，まさしく，これぞかの悪名高い österreichische Schlamperei なるものなのかと，開いた口のふさがらぬ思いを禁じえない読者も多いのではあるまいか。

だが，そういう判断は早計に過ぎるのかもしれない。

皇帝がカール・ヨーゼフの個人的負債を肩代わりする行為は，単に相手が命の恩人の孫だからというだけではなく，なぜオーストリア軍の一少尉が返済不能なほどの借金を積み重ねてしまったのか，その経緯・原因にもかかわっているからだ。

前にも指摘したように，少尉には weich という形容詞がよく似合うが，それは性格的なものより，時代から来る弱さでもある。反時代的な帝国軍隊に襲い掛かるのは，労働条件改善を求める剛毛工場の労働者たちのデモやストライキに代表される社会的な意味での民主主義だけではない。軍事的，政治的に見ても，国家単位の民主主義と言うべきナショナリズムによって，ドーナウ君主国の軍隊は今や四分五裂の状態で瓦解の寸前にある。オーストリア軍は，ハンガリー，チェコ，クロアチアをはじめ諸民族の出身者たちで構成されるいわば多国籍軍の様相を呈し，自らの故郷では若い世代が宗主国からの独立を求めて，秘密結社を組み，政治工作を展開していることを知りながら，その宗主国オーストリアを祖国として戦うことを余儀なくされている。次に戦争が起きれば必ず多民族国家が崩壊することを予感しながら，演習に参加しなければならない。士気を奮い立たせる何物もなく，軍人としての誇りからも使命感からも見放されて，閉塞状況を紛らすには強烈な酒と女とギャンブルしかない。カール・ヨーゼフも例外ではありえず，「90 度」をあおり，母親ほども年の違う貴婦人との愛欲に救いを求めて，借金を膨らませたのである。

時代錯誤のスパルタ人間である郡長ですら，「時代が悪いのだ」(S.392)と思うほどだ。ましてや，ボケ老人を演じて見せながら，その実，すべてを見通している(S.343)とされるフランツ・ヨーゼフ一世ともなれば，不名誉の原因を「借金かな?」(S.407)と問うただけで，それ以上の詮索はしない。辺境勤務の一少尉が作った返済不能な負債は，本人の不名誉である以前に，帝国とその軍隊の不名誉であり，皇帝自身の不徳を意味することを，フランツ・ヨーゼフは直感的に分かっていたのかもしれない。

そういうわけで，この「恩寵」には沈みゆくオーストリア君主国流の「正義」を認める

ことが出来るかもしれないのだが，帝国の落日と名誉の凋落を物語る，いささか滑稽で物悲しいエピソードであることに変わりはない。

ああ，《ラデツキー行進曲》！——「身捨つるほどの祖国はありや」[12]

身分差別的な封建的社会秩序を厳しく批判する民主主義者ロートのもう一つの顔は，反ナショナリズム的世界市民としてのそれであった。放浪のユダヤ人にとって，フランツ・ヨーゼフ一世治下の多民族国家ハプスブルク帝国は，反時代的な保守反動国家であると同時に，超民族主義的コスモポリタニズムの国でもあった。ある程度安らげるアズュールを提供してくれていたドーナウ君主国が，民族ごとの独立国家建設を目指して激化するナショナリズムによって倒壊せられることは，イデオロギー以前の，生死にかかわる問題でもあった。帝国への忠誠を存立の柱とするトロッタ男爵家の没落と並行する形で，多民族融和の君主国を称えるはずの《ラデツキー行進曲》が時代錯誤の愛国行進曲と化し，かつての輝きを失って行く様が繰り返し描かれている。

決闘前夜，軍医ドクター・デーマントとトロッタ少尉が別れの盃を酌み交わす場面，それは下町の飲み屋の調理場なのだが，表の店のミュージックボックスから，《ラデツキー行進曲》らしきものが流れて来る。幾つかよく知られた行進曲がメドレーで聞こえて来る中に，「最初の何小節かのドラム連打は耳障りな雑音で聞き辛く，かろうじてそれと分かる程度」の《ラデツキー行進曲》が混じっていたのだ。その上，「調理場の白塗りの壁の，ランプの傘が投げかける緑っぽい影の中に，赤みがかった銅製の巨大な二つのフライパンに挟まれる形で，純白の制服に身を固めた大元帥陛下のよく知られた肖像が懸かっていた。皇帝の白い服には無数のハエの糞が付着し，まるで散弾銃を浴びせられたみたいだった。フランツ・ヨーゼフ一世の目は，この肖像でも確かに青磁色に描かれてはいたようだったが，ランプシェードの陰でよく見えなかった。ドクター・デーマントは肖像を指さした。≫ほんの一年前までは表の店に掛っていたんですがね。亭主は自分が忠誠なる臣民であるという証拠を見せる気をなくしてしまったのですよ。≪」(S.233)［傍点引用者］

既にこれより前，カール・ヨーゼフが騎兵連隊に入隊して間もない頃，更に冒涜的と言うべき形でこの曲と皇帝の肖像がペアで出て来ていた。小説の中でこの楽曲が実際に演奏されるのは郡庁舎前広場以外ではここだけなのだが，それがなんと売春宿! 騎兵隊の将校たちがレージの女将の店に「愛の演習」(S.206)に繰り出すと，「さっそく中から下手くそなピアノがチンパラ鳴り出した，ラデツキー行進曲だ。」(S.207) 肌も露な「白い雌鳥たちの群れ」(S.208)に向かって突進する雄鶏たちの行進曲!

ちなみに，「ソルフェリーノの英雄」の孫カール・ヨーゼフが，娼館の壁に掛かっていた皇帝の肖像を，義憤に駆られて，というより，「祖父のように皇帝の命を救う機会に恵ま

---

12 寺山修司：「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」

れない」(S.208)ので，その埋め合わせに，額から取り外して持ち去る，という子供じみた振る舞いに及ぶのはこの時のことである。

幼年学校時代に郡庁舎前広場で演奏される《ラデツキー行進曲》を聞きながらカール・ヨーゼフが高鳴る胸に燃え上がらせた子供じみた英雄的夢想に冷水を浴びせる厳しい，というか，シラケさせる現実ばかりと直面させられる中で，唯一例外的に，彼の中に再び少年時代の輝かしい夢が生き生きと蘇る場面がある。(S.320ff)

首都ウィーンで，年上の恋人ヴァリ，フォン・タウシッヒ夫人とともに華やかな御聖体の祝祭パレードを目の当たりにした時のことだ。「神よ護りたまえ」の国歌が神の使徒たる皇帝を警護する軍楽隊によって歌われる中,「ボスニア兵の頭を飾る真っ赤なトルコ帽が日差しを受けて輝き，それはまるで，神の使徒・皇帝を称えてイスラム教徒たちが点火したお祝いのかがり火のよう」。「リピッツァ（イタリア・トリエスト）産の白馬」が優雅な歩みを見せ，ローマ・カトリック教会の祝福のように聖シュテファン教会の鐘が鳴り響く中，「ハンガリーの近衛兵」に守られて，「聖都イェルサレムの王」,「ドイツ民族の神聖ローマ帝国皇帝」フランツ・ヨーゼフ一世がしなやかな足取りで大聖堂の中に入って行く場面だ。

この時，カール・ヨーゼフは，少年の日，郡庁舎バルコニーの葡萄の葉陰で《ラデツキー行進曲》の演奏を聞きながら,愛国的な思いに胸を熱くした日のことを思い出すのだが，それは, 御聖体の祭というローマ・カトリックの神を称える祝祭的時空の中で, ボスニア，イタリア，ハンガリーといった諸民族の融和・統合のイメージを重ね合わせ，もはや過去の記憶としてすらおぼつかない「聖都イェルサレムの王」,「ドイツ民族の神聖ローマ帝国皇帝」といったフィクションに彩られて，かろうじて成り立ちえた想起だった。

しかし，「彼の目に祝祭パレードが発散する黄金の輝きは映ったが，彼の耳に禿鷹たちの陰鬱な羽ばたきは聞こえなかった。ハプスブルク家の双頭の鷲の頭上を，鷲の同族でありその仇敵である禿鷹たちが旋回していたのである。」(S.322)と語り手は続けている。

事実，華やかな御聖体の祝祭パレードの場面は，既にその二章前で，ポーランド貴族ホイニキ伯爵による冷徹な時代分析と君主国に対する末期的病状診断とによって，かりそめの夢幻にすぎないことが予告されていた。

「我が君主国は敬虔な信仰心の上に成り立っている。幾多のキリスト教諸国民を統治すべく神がハプスブルク家をお選びあそばしたのだという信仰の上に，です。我らが皇帝はローマ教皇の世俗世界における兄弟で，オーストリア=ハンガリー二重帝国皇帝はローマ・カトリックの神の使徒たる皇帝なのです。（中略）ヨーロッパの他のいかなる皇帝も彼ほど神の恩寵と神の恩寵に対する諸民族の信仰とに依存している者はいません。」(S.290)

ところが,「君主国は生きながらにして四分五裂の状態です。崩壊しつつある，いや既にもう瓦解しているのです。いつ死んでもおかしくない老人が，鼻風邪を引くたびに命を危ぶまれつつ，旧い王座を守っている，単にまだ王座に腰掛けることが出来るという奇跡によってね。いつまで続きますかね。時代はもはやわれわれなんて必要としていないので

す。この時代は先ず独立した国民国家の建設を望んでいる。みんなもはや神様なんて信じちゃいません。ナショナリズムこそが新しい宗教なのです。民衆はもう教会には行きません。彼らが出かける先は民族主義者たちの結社です。」(S.290)

御聖体の祝祭パレードは瀕死の帝国が懸命に演出して見せた大掛かりな白昼夢だった。

サラエボでの皇位継承者暗殺の報せが届いた直後の，民族性を剥き出しにしていがみ合う将校たちの姿を見たカール・ヨーゼフは「トロッタ家の祖国は崩壊し，粉々に砕け散った」(S. 424)と思うが，故郷の町の郡庁舎前広場でネヒヴァル指揮する《ラデツキー行進曲》の演奏を思い出し，あそこにはまだ「オーストリア」が残っているかもしれないと考える。

だがこれも幻想だ。指揮者の息子で陸軍幼年学校生のネヒヴァル jr はフォン・トロッタ郡長に，「新しい時代になったんです。多数の民族が一つにまとまっているなんてもう長くは続きませんよ」(S.359)と言っていた。カール・ヨーゼフの脳裏に蘇る《ラデツキー行進曲》はますます現実から遠い幻となって行く。

トロッタ少尉の最期の場面でも彼の頭の中に《ラデツキー行進曲》が鳴り響く。小隊を率いるカール・ヨーゼフは，喉の渇きに苦しむ部下たちを制して，自ら両手に防水布のバケツを持ち，土手の上の井戸に向かう。既に何人もの兵士たちが渇きに耐えかねて井戸へと駆け登る途中で狙撃され倒れていたにもかかわらず。「銃弾は彼の周りでビュンビュン音を立て，足元に落ちた。（中略）怖くはなかった。他の連中みたいに弾に当たるなど思い浮かばなかった。彼の耳には発砲される前からもう射撃音が，同時にラデツキー行進曲の最初の太鼓のリズムが聞こえてきた。彼は庁舎のバルコニーに立っていた。下の広場では軍楽隊が演奏していた。ネヒヴァルが銀のつまみのついた黒檀の指揮棒を振り上げた。トロッタは二つ目の布バケツを井戸に降ろした。その時シンバルが高らかに鳴り響いた。（中略）一発の銃弾が彼の頭蓋に命中したのはその時だった。彼はもう一歩踏み出し，倒れた。両方のバケツいっぱいの水が揺れ，ひっくり返り，彼の上にバシャッとかかった。暖かい血が頭から斜面のひんやりした土(die kühle Erde)の上に流れた。」(S.444)[傍点引用者]

幼年学校生カール・ヨーゼフが，郡庁舎のバルコニーでネヒヴァル指揮する軍楽隊の演奏を聞きながら，皇帝と祖国のために命を捧げることを願い，「ラデツキー行進曲を聞きながら死ぬのなら思い残すことはない」と思った，あの場面との，イローニッシュで対蹠的な関係は明らかだ。それだけではない。フォン・トロッタ男爵家の始祖となった祖父，若き日のヨーゼフ・トロッタ少尉が皇帝をかばって身代わりに重傷を負う場面とも比較される。「かくもつましく，オーストリア二重帝国国民学校の教科書に載せるに値しない死，それが〈ソルフェリーノの英雄〉の孫の最期だった。トロッタ少尉は武器を持ってではなく，両手にバケツを下げて死んだのである。」(S.445) ——「両手にバケツを下げて」，つまり大地を潤す農民の姿で。転換点「ソルフェリーノ」から 55 年後のこれが帰結である。

かつて彼がそのために命を捧げたいと願った祖国 ——「神聖ローマ帝国の普遍主義」を引き継ぎ，「超民族的調和を図ろう」と努める多民族国家ハプスブルク帝国 —— は「崩壊

し，粉々に砕け散」(S. 424)ってしまっていた。「身捨つるほどの祖国」などもはや残っていないことを彼が知らぬはずはない。彼の耳の奥には常にドクター・デーマントの「こんな軍隊なんか辞めたまえ」(S.239)という声が響いていたが，皇位継承者暗殺後に将校たちが見せた本性を露わにしての諍いを目の当たりにして，ようやくその忠告に従う決意を固め，大戦が始まるまでのほんのひと月足らずの期間ではあったが，ポーランドの大地主ホイニッキ伯爵の領地を管理する仕事に就く。トロッタ家の人たちには，スロヴェニアの大地を耕した祖先たちの農民的遺伝子が強く組み込まれていたが，爵位だけでなく多大の財政支援まで賜った皇帝への恩義から，帝国を支える官吏や軍人の道を歩むほかなかったのだった。開戦の報せを受けたカール・ヨーゼフは当然ながら再び軍服を着る。

最初の数日間で彼が目にした光景は，詩人トラークルの体験とほぼ重なる。死の前日，墺露の戦争の中でどちらの軍によってか処刑され，吊るされたまま風に揺られている聖職者と民間人三人の死体を一人一人ロープから降ろし，独りで近くの墓地まで運んで行き，軍人の名誉の象徴である「抜き身のサーベルで(mit dem *blanken Säbel*)」(S.443)[傍点・強調引用者]墓の間の地面(Erde)を切りほぐし，窪みに遺体を横たえ，土(Erde)で覆って十字を切ったのだった。幼年学校時代に，郡庁舎前広場で演奏される《ラデツキー行進曲》を聞きながら胸を熱くした愛国的夢想の中では，「抜き身のサーベルが煌めき(sein *blanker Säbel* blitzte)」(S.160) [傍点・強調引用者]と言われていた。彼の行為は少年の日の夢と旧いハプスブルク帝国を埋葬する儀式をも兼ねていたであろう。トロッタ少尉が死の瞬間握りしめているべきだった武器（サーベル）はこの時すでに土に捧げられていたのだ。

銃弾が飛んでくる中，我が身だけは安全とばかり，記憶に蘇る《ラデツキー行進曲》の響きの中で非英雄的な死を遂げるカール・ヨーゼフの最期に関して，「ソルフェリーノの英雄」の孫ゆえの首尾一貫した能天気ぶりを指摘する Scheible の説[13]に，筆者は与しえない。

時代に追い越され，諸民族を忠誠心で一つに束ねる力を失ってしまった《ラデツキー行進曲》の遠い記憶と心中する，フォン・トロッタ男爵家三代目カール・ヨーゼフにとって，他にどんな道が残されていただろうか。彼が流した血は，「金色に輝くトランペット」や，「漆黒のティンパニーの上に」(S.160)ではなく，握りしめていたバケツから溢れ出た水と混じり合って，土(Erde)の上に流れる。トロッタ家本来の故郷であると同時に，敵対し合うあう諸民族をも最後にはすべて包み込む母なる大地(Erde)に還ってゆく。

[13] Scheible, Hartmut: ebd. S.133.　Scheible の研究は鋭く有益な指摘に満ちているが，「ソルフェリーノの英雄」の子孫たちの時代錯誤的蒙昧を批判するに急で，「ソルフェリーノ」という，民族独立運動が激化して行く転換点で，多民族国家の貴族に取り立てられたトロッタ家の悲劇的めぐり合わせの意味合いを一面的にしか見ていない点に，不満を覚える。

Für die Demokratie, gegen den Nationalismus: der janusköpfige „Radetzkymarsch“

Tomotaka Takeda

1859 besiegte Norditalien den Vielvölkerstaat Österreich im Unabhängigkeitskrieg. In der Schlacht bei Solferino, die den Ausgang des Krieges entschied und zum ersten Mal den Untergang des Reichs ahnen ließ, rettete Leutnant Trotta dem Kaiser das Leben. Es war die Ironie des Schicksals, dass Trotta am historischen Wendepunkt von der angeschlagenen Monarchie in den Adelsstand erhoben wurde, was für seine Familie bedeutete, dass sie von slowenischen Grenzbauern zu Österreichern wurden. Sie mussten das düstere Schicksal des Habsburgerstaates teilen, indem sie als loyale Untertanen gegen die erwachenden nationalistischen und demokratischen Kräfte kämpften.

Eine bittere Ironie des Autors kann man auch darin sehen, dass er für den Titel der Verfallsgeschichte des Habsburgerreichs und der Trottas seit Solferino ein Werk der Militärmusik zitiert, den >Radetzkymarsch<, mit dem ursprünglich der Sieg des österreichischen Feldmarschalls Radetzky gefeiert wurde, der 1848, elf Jahre vor Solferino, im ersten norditalienischen Freiheitskrieg die nationalistischen Aufständischen niedergeschlagen hatte. Der Marsch ihm zu Ehren wurde noch im selben Jahr von Johann Strauß I. komponiert.

Die Familiengeschichte der Trottas spiegelt exakt die Probleme des sterbenden Kaiserreichs. Zu beachten ist, dass der Autor Roth, ein Demokrat, die soziale Ungerechtigkeit und Ungleichheit scharf kritisiert, während er als jüdischer Kosmopolit—er gehörte nicht zu den Zionisten—gegen die nationalistischen Bewegungen war, die die übernationale Monarchie, die ihm ein Asyl gewährte, zerstörten. Er war für die Demokratie, aber gegen die Gleichberechtigung der Nationen.

In seinem Roman werden einerseits Fragwürdigkeiten der Ständegesellschaft einer Untersuchung unterzogen. Warum ist z.B. der Bezirkshauptmann dem Gendarmeriewachtmeister Slama gegenüber so kalt, dessen Frau von Karl Joseph schwanger wurde und an der schweren Geburt starb? Aus welch einem geringfügigen Anlaß duellieren sich die beiden Offiziere, um dann ihrer strengen Standesehre zum Opfer zu fallen. Mit welch grotesker Besessenheit kämpft der Vater, der Bezirkshauptmann, um die Ehre seines Sohnes, des Leutnants, und der Familie Trotta zu retten, die durch die nicht zurückzahlbaren Schulden gefährdet ist. Alle diese Episoden weisen auf Fluch und Bann hin, die auf dem satisfaktionsfähigen Adelsstand lasten.

In der Verfallsgeschichte der Militärmusik >Radetzkymarsch<, die zugleich die der Trottas und des Habsburgreichs ist, spiegelt sich jedoch die Wehmut des jedem Nationalismus abholden Weltbürgers Roth. Der spielte zuerst unter dem Balkon des Bezirkshauptmanns und ließ Karl Joseph für den kosmopolitischen Vielvölkerstaat glühen, dann aber wurde im Bordell auf dem Klavier geklimpert, um die Offiziere zu den weißen Hennen marschieren zu lassen, und in der nächsten Szene sind deren erste Trommeltakte, die in die hintere Küche der Kneipe vom vorderen Musikapparat her erklangen, durch heisere Nebengeräusche entstellt, und zulezt muss der Enkel des „Helden von Solferino“ mit dem im Ohr ertönenden Radetzkymarsch-Phantom den einfachen Tod finden.